座談会　京都の哲学と『哲学研究』

藤田正勝
氣多雅子
井上克人
中畑正志
上原麻有子
司会

中畑　京都哲学会の雑誌『哲学研究』は本号で記念すべき六百号を迎えます。また第一号は大正五年、つまり一九一六年発行ですので、ちょうど創刊百年にもあたります。そこで、この雑誌の歴史と、またこの雑誌を一つの重要な媒体として展開された京都の哲学者たちの活動を回顧しつつ、今後の『哲学研究』の方向についても何かご示唆がいただければと思い、このような座談会を企画し、藤田正勝先生、氣多雅子先生、井上克人先生の三先生にお集まりいただきました。藤田先生は西田幾多郎をはじめとして日本の哲学者たちの研究をずっと主導されておいでですが、さらに京都哲学会や『哲学研究』の歴史にも通じておられます。氣多先生もご専門の宗教哲学の観点から、西田幾多郎をはじめとして京都学派の哲学について、ある意味ではそれを継承する形で深い考察を展開しておいでです。お二人が京都哲学会の会員であるのに対して、井上先生は非会員ですが、ハイデガー、フッサールとともに、京都学派の哲学、日本近世近代の思想、さらに仏教思想まで広範囲にわたるご業績があり、いわば外部的視点からのご意見をうかがえるのではないかと思っております。司会は『哲学研究』の編集を担当している関係で中畑がつとめますが、このようなテーマについてはほとんど無知なので、現在京都哲学会のお仕事をお願いしている上原麻有子先生にもお手伝いいただくことになっています。上原先生は京都学派をはじめとした近代日本哲学を翻訳などの観点から論じられて国際的に活躍されていますので、たいへん心強く思っております。

さて、最初に、『哲学研究』が刊行へと至る文脈、創刊に関わる人びとの意図や意識、当時の他のメディアたとえば東京大学からすでに発行されていた『哲学雑誌』との関係、そしてこの雑誌刊行に対する反響など、創刊時の状況について、こうした事情に詳しい藤田先生に簡単にご説明いただけると幸いです。

創刊当時の状況

藤田　今回六百号に至るまでに出されたいくつかの特集号のエッセイなどを読み直していたのですが、ちょうど五百号に、最初に『哲学研究』の編集に携わられた植田寿蔵さん

が、「『哲学研究』の恩を想う」というエッセイのなかで「大正五年に創刊せられて、今日までまさに五十年」、「『哲学研究』は五百号に達した。これは大きい事実である」と書いておられます。それに倣って言えば、「創刊されてから今日まで百年、『哲学研究』は六百号に達した。これは大きな事実である」と言うことができるかと思いました。百年という時間の積み重ねはやはり大きな意味をもっていると思います。

さて、創刊の経緯を知る材料はそれほど多くないのですが、四百号の時に創刊に尽力された朝永三十郎先生の「『哲学研究』の発足」というエッセイが発表されています。それによると、それまで京都大学のスタッフの多くは東大出身者で『哲学雑誌』という発表の場所をもっていたが、この時期、大正五年頃になって京大でもたくさんの卒業生が出始めたので、彼らが研究者として出発してゆく上でその最初のステップとなるような発表の媒体を設ける必要があるのではないか、ということで、最初は「手習い草紙」として発表の場をつくりたいと考えた、と控えめな表現でその意図を表現されています。このことは、『哲学研究』の創刊の意図を探る手がかりになると思います。

同時に『哲学研究』の特色として、同じ四百号にやはり編集に携わられた澤瀉久敬さんが「編輯の思い出」というエッセイを書いていますが、この『哲学研究』には、中身の濃い、「時代を画する研究」が発表されたこと、そういう意味で、「『哲学研究』は日本の哲学思想誕生の器」になりえたことを記しておられます。この点では、若い研究者の思想形成にとどまらず、西田幾多郎、田辺元ら当時のスタッフたちが文字通り時代を画する研究を発表していく場となったと言えるでしょう。そういうこともあり、東京の研究者たちからも注目されました。そして何より大きな意味をもったのは、この充実した紙面を通していわゆる京都学派が形成されていった点です。

澤瀉さんは具体的にどれが「時代を画する研究」であったのかは書いておられないが、おそらく『善の研究』以後の西田幾多郎の思想、『自覚における直観と反省』に収められた諸論文、そして『働くものから見るものへ』に収められた論文、とりわけ「場所」という論文を通して形成された「場所の論理」に関する思想がそこで発表されました。田辺元の「種の論理」も『哲学研究』を通して形成されていきました。

ただし、これらの論文はどれも完成された論文ではなかったと言えるように思います。西田自身、『自覚における直観と反省』について「悪戦苦闘のドキュメント」であったと書いていますが、それは「場所の論理」に関する諸論文についても言えるのではないでしょうか。「場所の論理」は書き始める段階ではじめから全体が見通されていたわけではなく、さまざまな思想と対決しながら自らの思想をつくりあげていくそのプロセスが一つ一つの論文のなかに盛り込まれてい

る。そのような「悪戦苦闘のドキュメント」を当時の学生は読み、そこから自分自身の思想形成をおこなっていきました。『哲学研究』はそのような場を提供したと言えます。

当時の学生たちはSelbstdenkenという言葉をモットーにしたと言われていますが、西田や田辺の「悪戦苦闘のドキュメント」がまさにSelbstdenkenの営みとして受け取られ、そういう仕方で哲学と向き合っていくことを学んだのではないかと思っています。

中畑　いま、『哲学研究』の創刊当時の特質として、一方では卒業生たちに「手習い草紙」的なかたちで発表を提供し、他方で西田たちが論文を、かなり試論的な形で発表していくという、『哲学研究』のある種の冒険的な性格をご指摘いただいたと思います。

氣多　『哲学研究』は当時月刊でしたが、京大関係の哲学研究者にとってこれは唯一の発表の場だったのでしょうか。

藤田　いや、それ以外に『芸文』という雑誌が明治四三年に刊行されており、それが開学して間もない京大文学部の哲史文の三学科の教員たちの発表の場で、西田もはじめはそちらに寄稿しています。その後『哲学研究』をはじめとして三学科がそれぞれ雑誌をもつようになり、やがて『芸文』はその役割を終えることになりました。ただし『哲学研究』にしても、完全に専門に分化したわけではなく、中国文学の狩野直喜、ドイツ文学の成瀬無極、数学の園正造といった方々が執筆しておられる。あるいは東京大学の中島力造、姉崎正治といった方にも書いていただいており、かなり門戸を広く開いていたことも、この雑誌の一つの特徴かと思います。

氣多　現在でも、『哲学研究』に掲載されている京都哲学会の会則では、「本会は会員組織として会員には資格の制限を設けません」となっています。これは、いまのいわゆる学会などとは違うと感じます。この「京都哲学会」という組織は、当時どういう役割を果たしていたのか。『哲学研究』を発行し、それに執筆する人びとの集まりということなのでしょうか。

藤田　一方では『芸文』という哲史文にわたる雑誌があり、他方ではそれぞれの学問単位の学会も作られていったが、「京都哲学会」は個別科学の学会ではなく、当時の「哲学系」全体を大きく束ねる学会だった。その大会・講演会には哲学系の教授たちが全員揃って参加するという習慣がありましたし、発表者も参加者も哲学という枠にとらわれないものでした。開かれた組織運営がなされていたと言ってよいのではないでしょうか。

井上　当時東大には『哲学雑誌』がありましたが、先ほど紹介された朝永さんのエッセイによりますと、『哲学研究』はそれに対抗するものではなく、あくまで「手習い草紙」だということでしたが、やはり東京とは違った独自の哲学会を立ち上げようという意識はあったのではないでしょうか。

藤田　東大の『哲学雑誌』の当時の編集方針についてはあまり存じていませんが、たしかにある程度意識はしていたでしょう。ただし、「手習い草紙」という意識の方が強かったと思います。西田の「場所の論理」とか田辺の「種の論理」のような、時代を画するような研究がこの『哲学研究』を中心に発表されていくとは、朝永さんも見通していなかったであろうと思います。

井上　それでも当初から反響は大きかったのでしょうね。

藤田　ええ、創刊号に発表された西田の「現代の哲学」をはじめとして、注目された論文が発表されましたから。最初は会員中心だと思いますが、西田や田辺の活躍を通じて全国的に会員や読者を増やしていったと思います。

氣多　東大の『哲学雑誌』もやはり月刊誌ですね。このころの哲学関係の雑誌からは、現代とは違って、やはり「手習い草紙」という言葉の意味が想像できるような気がします。

藤田　いまから考えると、月刊誌の発行には、編集者のたいへんな努力があったと思います。編集に携わった植田寿蔵さんや澤瀉さん、あるいは中井正一さんらのエッセイからは、その苦労が偲ばれます。とりわけ本数を確保するのに非常に苦労されている。優秀な卒業論文を掲載するということもありましたが、教員は一年に一本ないし二本の論文を書くという原則がありました。それにもかかわらず、やはり出さない方もいて（笑い）……。

思索の共有の場

氣多　そのあたり、思索の仕方とか論文の作り方が、いまとずいぶん違う気がします。思索の過程にあるものも公にして、批判を受けて書き直すなど、思索をする場がある程度共有されていたという側面がある。また、相互の影響の及ぼし方も、ずいぶんと密度が濃かったと思われます。

中畑　具体例を挙げていただくと……

氣多　論争が盛んに行われていた時期がありました。田中美知太郎さんが五百五十号の特集記事で大正十五年から昭和二年にかけて「論争の季節」が一つのピークを迎えると書いておられますが、西田、田辺相互の論争、田中美知太郎自身の論争、などがあります。雑誌の誌上でこのように表だって批判を行い、それにまた応答するというような形は、なかなかいまは見られない気がします。

藤田　初期のころについて言えば、西田が「現代の哲学」や「自覚における直観と反省」でリッケルトやフッサールを取りあげたり、美学者のフィードラーについて論じたりしており、ディルタイについても最初に本格的に論じたのは西田だったと思われますが、西田がそのように論じた思想や哲学者をめぐって、他の人が、たとえばリッケルトやコーヘン、フィードラーについて書くなど、相互のやりとりや関係が密接であったことが初期の『哲学研究』の特徴と思われます。

そこからやがて、昭和五年に田辺の「西田先生の教を仰ぐ」という西田への批判論文が発表されるに至りますが、相互の影響や批判が生まれていく素地は初期からあったのではないでしょうか。これは人によって見方が違うでしょうが、『哲学研究』の歴史のなかでいちばん大きな影響をもった論文は、田辺の「西田先生の教を仰ぐ」ではないかと私は思っています。そうした相互影響や相互批判の場になりえたことは『哲学研究』の大きな特徴だと思います。

上原　藤田先生のおっしゃることは、たしかに『哲学研究』の特色だと思いますが、『哲学雑誌』のほうでもそのようなことがあったのでしょうか。

藤田　『哲学雑誌』のことについては詳しくはないので比較してお答えすることがむずかしいのですが、このあたり井上先生いかがでしょう。

井上　私も『哲学雑誌』についてはよく知りません。しかし、京都の独自の学風というものが培われていったということは言えると思います。それは、田中美知太郎さんが五百五十号に寄せられたエッセイのなかで、「当時の京都大学の哲学科は哲学のメッカという感があった」とか、下村寅太郎さんが五百号での回想のなかで「京都に対する畏敬の念」という形で書いておられることからもわかります。また下村さんは、東京に移り住んで「京都の空気の密度の濃さ」を感じたと書いておられます。たしかに、京都哲学会を立ち上げた当初には広く開かれた気風を意図したことはあったでしょうが、次第に「密度の濃さ」というものが形成されていったことが特徴と言えるのではないでしょうか。それは言い換えると、京都の気分の重々しさというか、閉ざされた空気でもあって、人間の結びつきも濃密である。やはり、先生は厳然たる中心であり、周囲は先生に対して尊敬の念を抱いていたし、自分の先生についていろいろと語る。けれど、下村さんによると、東京ではそれがない、というわけです。自由だけどどこか散漫。京都はどこか閉じたところがあって、それが思索を沈潜させたというのですが、これは当たっている部分があると思います。思索の現場を共有していたり、論争の関係に立ったりするわけです。

田中美知太郎さん自身にも論争というのがあり、田中さんが出隆さんに対する批判をしたが、それに対して岩崎勉さんが義憤を感じて出隆さんを弁護した。これに対して田中さんが「ソクラテス以前の哲学におけるピュシスの意味」という論文を『哲学研究』に掲載した。田中さんによれば、ディールズが編集したソクラテス以前の哲学者の資料集やアリストテレスの著作を読めば、「ピュシス」の概念は、「自然」という訳語に依拠してあとは連想によって自由自在に解釈できるようなものでなく、綿密な研究が必要であるにも拘わらず、それをまるで簡単に納得できるようなものとして考えている岩崎氏を、当時出た岩崎氏のアリストテレス『形而上学』の

誤訳の指摘も含めてかなり厳しいことばで批判し、学問知識は厳密なものでなければならないと主張されている。ところで、このこととは直接に関連はないのですが、私の個人的な印象では、京都の学風には、どこまでもテキストを綿密に読み込み、しかもそのテキストが言わんとするところに主体的に肉薄していって、それを内在的に捉えようとするところがあって、自然、そうした研究にも密度の濃さが現れますが、それにひきかえ、東京の学風は、テキストの緻密な読解もさることながら、それに関連する文献資料を広く渉猟し、その研究の成果として、文献学的な知見を含む該博な知識を表面に出して誇示し紹介するという傾向があり、学風の違いを感じます。

藤田　たしかにいま紹介していただいた下村さんのエッセイは面白いですね。京都には「巨峰」、大きな山があって学生は谷間にいる。東京は平原でどこにも中心がない、という表現をされている。これは、先ほど挙げたような論文を西田が書くと、周りにいた同僚や学生はそれを読んで、そのなかで論じられている、たとえばディルタイやフィヒテを、そしてそれについての西田の考察を自分自身が考える手がかりにしている。そこから書かれた論文は、ある意味で西田に対する応答という性格をもっていた。そういう雰囲気を、後年下村さんは東京に行かれてから、「重々しい雰囲気」と表現されたのでしょう。それに対して『哲学雑誌』のほうは、誰かに対して書くという意識を執筆者の方々がほとんどもっていなかったかもしれない。

氣多　それはSelbstdenkenの重視ということに由来するという面もあるのではないでしょうか。

藤田　そうですね、一方では、『哲学研究』や京都哲学会に集った人びとの間である程度問題意識が共有されていて、一つ一つの論文がバラバラに書かれたり収録されたというのでなく、なんらかの仕方でつながりがあったと言えるのではないでしょうか。Selbstdenkenのほうは、ドイツやフランスの哲学をただ紹介するだけでなく、自分自身の思索を展開してはじめて哲学と言えるんだ、という意識を西田や田辺がもっていたことに由来すると思います。そうした姿勢を学生たちが汲み取り、自らのものにしていったのではないでしょうか。

氣多　Selbstdenkenとなるとどうしても重くなるわけですよね。軽くはすまされない。そのように書かれた論文を、読む側も重く受け取る。それがやはり濃密な議論、そしてある意味では閉じた議論とも言われることになる。「どこまでも深めていこう」という性格の思索や議論になるように思います。

井上　西田の「ケーベル先生の追懐」に「広からねど深く」という言葉が出てきますね。

藤田　おそらく朝永三十郎さんが「手習い草紙」と表現した時代には、そこまで考えてはいなかったでしょうが、自分自

身の真剣な思索を世に問うという西田、田辺らの姿勢が『哲学研究』のそのような方向を作りだしていったのではないでしょうか。

上原　「手習い草紙」となると、プロセスを提示すればいいということになりますよね。そうなると、相互のやりとりも、よりやりやすくなると思います。西田の執筆の仕方については、よく言われることですが、未整理のまま論文になってそれが全集にも収められていますが、それも「手習い草紙」という性格があった。しかしそのことは、「深める」ことの邪魔をするのではなく、むしろ促進していると思います。

藤田　しかも、それが自分自身のなかだけで深めるというのではなく、やはり周囲に対してこうした思考もありうるのではないか、ということを示すことによって、それがまた著者自身に跳ね返って、思索を深めていくというプロセスがあった。たしかに全体を見通したかたちで論文を執筆するのではなく、悪戦苦闘した跡を言葉にしていく。それがかえって、議論の場所を共有することに結びついていったのかもしれない。

氣多　西田の場合、できあがった思想というのではなく、現在進行形で哲学する。それが西田が考えていた哲学のあり方、思索のあり方で、それが伝えられています。できあがった思想を受け取るというかたちではない。

藤田　林達夫さんが「思想の文学的形態」と題したエッセイのなかで、西田の文章には「仕事場の雰囲気が常に漂っている」と書いたことがありましたが、それだからこそ、まわりの人に問いかける力があった、という気がします。

中畑　私は西田についてほとんど無知ですが、事情があって西田が「場所」の概念をアリストテレスとの関係でどのようにして考えたのかを少し調べたことがあります。西田がはじめて「場所」の概念を術語的に使用したと言える論文「内部知覚について」では、同じくはじめてアリストテレスの「基体」に言及していますが、それはアリストテレスの『形而上学』Z巻三章の冒頭をロス（W.D.Ross）の英訳で読んで、そこから主語となって述語とならないものという概念を引っ張ってきています。このアリストテレスへの参照は、ロッツェによるアリストテレスの本質概念への言及をきっかけにするかたちで始まっていますが、西田はこの論文を発表した前年の後期から演習でロッツェの『形而上学』を取りあげ、またこの年には「アリストートルの形而上学について」という講義をおこなっている。言ってみれば、勉強したり話したりしたことをかなり直接的に論文にしているように見えます。実際『哲学研究』に初出時には、アリストテレスのその箇所の読解として「[四つのもののうちで] 真の実在と考うべきものは、主体substratumであろうと云っている」と、いわゆる基体（ヒュポケイメノン）を真の実在とする見解をア

リストテレスの主張として書いていますが、『働くものから見るものへ』に収録されたときには「私はその中実在の真の概念というべきものは基体substratumであろうと思う」と、自分の主張へと訂正しています。おそらくあとで自らの誤読に気がついたか、周囲からの指摘があったのかもしれません。いずれにしても、こんにちでは教師にも学生にも許されないような形で論文を発表していた（笑い）。西田だから許されたのかもしれませんが、ともかく『哲学研究』はそのように試論的に使える場であったということが言えそうです。まあ、毎月刊行する以上、そういうことはやむをえなかったのかもしれませんが。

そうしたことが、皆さんのおっしゃるような『哲学研究』の特色に結びついたのなら、西田にとっても、また他の人々の思考を喚起したという点でも、結果としてよかったのかもしれません（笑い）。

京都学派とその批判者

井上　いままで語られたように、Selbstdenkenを重んじる京都学派の伝統が作られたが、しかしそれに対して厳密なテキスト読解を重視する田中美知太郎さんのような方からの批判というものも出てきますよね。そのへんのところももう少し話す必要があると思います。

中畑　たしかにこれまで西田を中心に語ってきましたが、西田に対する田辺の批判があり、のちになると戸坂潤、三木清ら、いわゆる京都学派に対する明確な批判者が登場する。さらにまたいま井上先生が指摘された田中美知太郎さんのような別の形での批判も展開される。こうした内的な批判と外的な批判も、『哲学研究』に掲載されていくわけです。

そこでまず、京都学派の内部ないしその周辺における相互の関係、とりわけ論争や批判について、みなさんからお話を伺えればと思います。

藤田　『哲学研究』が創刊された大正から戦前の時期まで多くの哲学者が出てきたが、ほとんどの人が西田の思索を出発点に置いていた。その典型が西田と田辺の論争であったわけですが、そのあと戸坂潤とか三木清といったマルクス主義の立場から批判した人びとも、さらには西谷啓治ら近くにいた人も、西田の哲学を踏まえたうえで、それと対決するという形で自分自身の哲学を作りあげていった。そのようにスプリングボードの役割を果たしうるものとして西田の哲学、そしてまた田辺の哲学があったと言えると思います。そういうものの中心に西田がいました。

中畑　そうした批判者たちもこの『哲学研究』に書いているわけですが、彼らの間で西田や田辺が中心になって作りあげられてきた雑誌『哲学研究』はどのように受けとめられ、どのような役割を果たしていたのでしょうか。

藤田　三木にせよ戸坂にせよ、こうした人びとはすでに東京

に出て自分の発表の場を得ていました。そこで西田や田辺を批判しましたので、『哲学研究』がその批判の主たる媒体となったわけではありませんでした。他方、西田や田辺に近かった人びとは、正面から批判すると言うよりも、そこに残された問題を新たな視点から問うということをしました。『哲学研究』はその場になったと思います。

氣多　月刊誌でしかもこれだけの数の論文を掲載したわけで、編集に携わった方々の話からしても、査読というものがなかったわけですね。だから自由にかけた（笑い）。

中畑　たいへん興味深い指摘です（笑い）。

藤田　教員は無条件で書けました。

氣多　学生も先生の推薦で卒論を載せたりしていますよね。

藤田　先生が査読して、と言うより、印象に残ったものを（もちろん主観的な判断ではありませんでしたが）推薦したということです。

氣多　しかも本人が書いて編集者に渡すという形だったようで、事前に教員が目を通して載せるというのでもなかった。ほんとに自由だったようですね。査読が必要だという発想がそもそもなかったのではないでしょうか。他の人の説もある程度共有されるものと思っていた気が少しします。

藤田　たとえば「身体」の問題も、当時共有されたテーマで、三木も「社会的身体」という考え方を提起していますが、西田のなかにもそのような考え方があって、相互に思想を共有し、刺激しあうという関係があったと思います。そして弟子の方から、たとえば下村のライプニッツ研究が西田に影響を与えるということもありました。それぞれの思索を、独自の成果というのではなく、相互に生かし合って新たな研究の展開のきっかけにしている。そのあたりはいまの感覚とは少し違うかもしれません。そこに京都学派の特質を見ることができるかもしれません。

戦後の京都の哲学と『哲学研究』

井上　しかしながら、そうした京都学派の哲学が次第に沈滞していった流れは否めません。その原因の一つには、戦争責任の問題がありますが、それにはたんに時流の影響を受けたり軍部の圧力に屈したというだけでなく、京都学派の哲学には宗教的な色彩が強いということもはたらいているのではないか。宗教的な真理は政治や社会、経済などに通用しない。

こうした京都学派のかわりに、たとえば野田又夫さんが英米の分析哲学を紹介したり、また哲学史研究の重視ということがあり、次第にSelbstdenkenというものが希薄になっていく。こうした流れの中で一九七〇年代後半から「現代哲学研究会」が立ちあがって、それまでの「京都学派」のイメージを一新させて、ヨーロッパの現代哲学を積極的に取り入れながら徹底的に討論し、新しいかたちでのSelbstdenkenを求めていくということがあった。他方で、京都学派に見られる宗

教哲学もやはり重要であるという考え方があり、「京都宗教哲学会」が組織され、宗教哲学研究という流れができる。さらに京都大学文学部に日本哲学史専修が設置されて、日本哲学の研究がそこで引き継がれ、それぞれに学術誌が発刊される。また、関西では「関西哲学会」も発足し雑誌『アルケー』を刊行していく。さらにまた京大教養部が改革されて、総合人間学部、人間・環境学研究科が創設され、『哲学研究』とは独立に、一九九五年に紀要『人間存在論』が発刊されましたが、こうしたさまざまな流れのなかで、京都哲学会と『哲学研究』は果たしてどのような位置づけをもちうるのか、気になっています。

中畑　いま多くの問題を一度に提起していただきましたが、そのそれぞれについてさまざまな見方があると思いますので、順番に論じていくことにしましょう。まず最初に、戦争というものがもっていた意味と、その後教員のパージや新しいスタッフの着任をはじめとしたいろいろな出来事があるなかで、京都哲学会や『哲学研究』はどのような位置を占めていたのか、という点です。それに関連して、井上さんからは「宗教的真理が政治や社会に通じない」という、氣多さんを刺激するような発言もありましたが。

氣多　宗教と政治の関係については実際の歴史の状況と結びついてすごくむずかしく、イラン革命以後に別の様相を見せてきているので、この問題はとりあえずわきに置くことにします。戦前には京都学派と政治との関係があったが、戦後は宗教哲学の方向に進み政治との関係が断たれたというのは、おそらく西谷啓治が戦前時局に関わる発言をしていたが、戦後教職追放五年間を経て京大に戻ってきて、宗教哲学の方向に徹底していく、ということからそのように語られるのだと思います。そこから京都学派の哲学の方向が変わったという見方が出てきます。これは西谷の仕事をどう評価するかにかかわるので、私自身は西谷の哲学は一貫していると思っていますが、一般的な見方だろうとは思います。そうしたなかで『哲学研究』に対する見方も変わっていく。ただその見方の変化には、学問の専門分化が進み個別学会が次々と組織されたりするなど、さまざまな形の変化が関係しています。『哲学研究』は、それまでのスタイルを保持しようしてきたがそれがそのままの形では通用しなくなって、現在に至っています。ここしばらくは、年二回刊行で論文が三本という形態になっています。これをどうするか、というのは私たちの問題です。

藤田　『哲学研究』の理念が今後どうなっていくのかといった問題は、最後に論じることにして、戦中戦後ということで言うと、京都学派のなかで時局の問題に積極的に発言した人に対する批判は、戦後になってたしかに強かった。京都学派の人びとがそうした発言をどのような意図でおこなったのか、それが実際にどのような意味をもったのかは、綿密に読

み解かなければならないと思いますし、一律に論じられないと思います。しかしいずれにせよ、戦後には京都学派の哲学に対する強い批判があったし、西田をそのまま受け継ぐような形で議論するような論考は『哲学研究』でも発表されなかった。『哲学研究』にかぎらず一般的に、京都学派について議論することを忌避する風潮がありました。そうした風潮を乗りこえて、西田や田辺が語ったことからわれわれは何を汲み取ることができるのか、という視点からあらためて彼らの著作を読み直そうという方向がはっきりあらわれたのはここ二、三〇年くらいのことで、そのことに尽力されたのは上田閑照さんだと思います。しかし戦後まもなくは批判が強かったことは事実で、『哲学研究』で発表された論文をみても、哲学史の研究、文献学の視点からなされた研究が多く発表されている。このことが『哲学研究』や京都の哲学にとってもっている意味について、もし中畑さんのほうからお考えがあれば発言していただきたい。

哲学史とSelbstdenken

中畑　私の考えと言うよりも、田中美知太郎や私の師である藤澤令夫の受け止め方の紹介ということになりますが、田中には、「雑然たる読書の刺戟によって生じた感想や思いつきを綴った、いわゆる悪戦苦闘のドキュメント――実は一種の読書ノオトに過ぎないもの」という有名な言葉があります。また、藤澤も若いころから哲学への志望をもっていたが、「名の知られた現役の哲学者たちの論文に接するごとに、こういう特殊な言い回しを身につけないと日本で哲学はやっていけないのだろうかと、はなはだ心細い思いをした」と述べています。こうした批判の矛先が、主として「京都学派」に向けられていたことは事実で、「京都学派」に対して戦前戦中からこのような批判的な受けとめ方もあったわけです。戦後、「京都学派」とされる哲学者は公職追放などの処分を受けて京大の哲学科は陣容を一新し、たしかに哲学史研究に力を注ぐことになるわけですが、このような新しい研究方向には、批判を避けるというのではなく、戦争への荷担を含めたこれまでの哲学研究のあり方への反省があると思います。藤澤は、日本の哲学界が、他の産業と同じく、近代化を果たすために西洋の哲学の最先端部分を学習するのに忙しく、その伝統を培ってきた基層の部分に目を向けようとはしなかった、さらにその際に先端部分に対する反射的思いつきを難解な和製哲学用語を用いて論じていた、というようなまとめをしたうえで「皮相上滑りの哲学」と呼んでいます。哲学の歴史を軽視する傾向と哲学者たちの戦争への荷担がどのような意味で、またどの程度まで結びついていたのかは、慎重な分析を要すると思いますが、従来の哲学のあり方への反省から哲学の伝統の大本に立ち返り、そもそも哲学とはどのように形成され営まれてきたのかということを自分たちの頭で理解

しようとすることには、たしかな理由と必然性があったといえるのではないでしょうか。少なくとも日本の哲学には、そうした途を一度は歩む必要があった。

藤田　そういう考え方はよく理解できます。たしかにそうした基礎研究の上に哲学が構築されなければならないと私も考えます。が、他方で、西田幾多郎が木村素衛さんのフィヒテ『全知識学の基礎』の訳に付した序文のなかで書いていることも重要だと思います。そこで西田は流行に左右される風潮を厳しく批判しているんですね。いちばん新しい哲学の動向を紹介するのが哲学なんだというような風潮が西田の時代にもすでにあったということなんですが、流行を追うのではなく古典に沈潜しなければだめだ、ということを強く主張している。それを当然の前提としながら、古典のなかに沈み込んでしまうのではなくそこから「生きて出なければならない」ということをそこで書いています。西田も田辺も、そういう姿勢で自分の思索を展開し、それを『哲学研究』に書いてきた。その意義は大きいと私は考えています。

氣多　西田とか田辺とかは非常に強い問題意識をもっていたのだと思います。明治時代に生まれて、日本人の世界観・価値観に対して西洋の新しい学問や技術、文明が入ってきて、その間で引き裂かれ、自分自身の存在の基盤が見失われるという、当時の日本人が直面した問題に対する意識を強烈にもっていた。だから、自分自身の哲学を作りあげていかなければならないという必然性があったのでしょう。彼らの哲学が一般にも人気があり、広く読まれたのも、当時の日本人の多くがそのような問題意識を抱えていたからだと思います。西田や田辺に対する田中、藤澤氏の批判に見られるような対立は、西欧においても見られます。ハイデガーのギリシアの文献解釈の恣意性に対する批判もそうです。この対立は、そもそも哲学の伝統の一部であり、京都学派を批判して哲学の歴史を重視するという流れが起こってくるのも、日本に哲学が根を下ろすためには必要なことであったと思います。

上原　実は明治に西洋の哲学を輸入し始めた当時も、すでに、井上哲次郎、三宅雪嶺とか井上円了などには、仏教をベースにしながら、日本独自のかたちを目指す、何か日本的なものを出そうという強い意識がありました。明治初期もそうした意識は共有されていたように思われます。このあたりのことは、井上先生がお詳しいのですが、そののちに、京都でまたあらたに日本独自のものを生み出すことになるわけです。この京都での運動は、哲学が輸入されて日本の哲学研究もある程度成長した上で出てきたもので、明治の初期の動きとはまた違うものと考えた方がいいのでしょうか。

井上　厳密にいえば、明治の初期はどちらかと言えば、政治色の強い啓蒙思想家を輩出した時代で、本格的な西洋哲学の受容は明治二〇年代以降になります。とくにドイツ哲学が移植されていくわけですが、当時の東大アカデミー哲学は、伝

統的な東洋思想と西洋哲学の折衷的な試みに終わってしまったのではないでしょうか。日本独自の哲学的展開とみなしうるのは、やはり西田幾多郎からではないかという気がします。井上哲次郎や井上円了は、いわゆる「現象即実在論」を東洋独自の哲学として標榜したわけですが、西洋哲学、とくにドイツ観念論を神秘主義的に捉えて、それを『起信論』に代表される大乗仏教の思想と折衷させただけといった感は拭えません。

上原　アイデアはあったけれども、まだ形にするには至らなかったのが、明治の中期の人びということですかね。

氣多　西田が禅に強く惹かれながらも、自分の仕事は哲学だ、と語り、基本的に西洋哲学の概念を使って自己の思索を語ろうとするわけですね。西田が哲学をしなければならないということのなかに、そうした独自のものを哲学で産み出さなければならないという意識が強くあったと思います。

藤田　さきほど言及した「生きて出なければならない」ということのなかに含まれているのは、井上哲次郎のように西洋の哲学と東洋の哲学を並べてそれを折衷的に結びつけようというのではなく、西洋の哲学がいま直面している課題をどのように考えていくのかという視点で自分自身の思索を紡ぎだしていく、ということだと思います。そこに、西田が長く携わった禅の体験も生きてくるわけですが、直接それを生かすことを目指したということではない。哲学の問題を自分自身の問題として引き受けて自分自身の思索によって発展させるという意図から、「生きて出なければならない」と語られたのだと思います。

上原　そうすると、京都の哲学者たちは、自分個人の問題として哲学を営むという意識が強かったのでしょうか。明治の初期はやはり新しい国家建設というなかで、という視点がどうしても働いていたという気がします。

氣多　それはたしかにそうですが、個人というのはいま私たちが考える個人とは違って、明治の日本人たちが共通して抱えている精神的危機を根柢から引き受ける個人です。だから、個人の問題なのですが、それが共有されている、という意識が強かったと思います。

藤田　京都の哲学者たちが直接的に国家の問題を考えていたわけではなかったことはたしかです。ただし議論が共有される場があり、相互に刺激を与えながら問題を考えていくという意識がとりわけ京都では強かった。一人一人がその結びつきのなかで問題を考えていたという面があったと思います。

中畑　日本で西洋の哲学に学びながら哲学を遂行することの意義をどう考えるのかは、いぜんとしてわれわれの課題ではあるわけで、その課題に対する応答の一つが藤田先生のおっしゃった古典にまなびつつそこから「生きて出る」という姿勢だと思いますが、批判者たちにとっては、「そこから生きて出る」といっても実際にはその「出方」はかなり恣意的に

見えたということはあるだろうと思います。古典を読みそこから学ぶということは、一方では自分自身の考え方や論理がそのままでは通用しない場面に出会ったりすることを含みますから。

井上先生が提起された問題として、Selbstdenkenが希薄になったのではないか、というご指摘がありましたが、この点についてはいかがでしょう。ただ、そもそもSelbstdenkenとそうでないものとはどのように区別されるのか、たとえば哲学史研究はSelbstdenkenでないというようなことは言えるのでしょうか。

井上　そうは明言できませんが、哲学史研究はややもすれば用語の詮索や文献学的なところにとどまってしまう傾向があり、そうした反省から「現代哲学研究会」が組織された。そこでは従来の京都学派とは異なるかたちで京都の哲学を作りあげなければならない、という使命を感じていたと思います。

藤田　現代哲学研究会を推進された方々のなかには、たしかに哲学史研究への沈潜に対する批判や京都学派の哲学の継承のされ方に対する批判があったと思います。その成果の一つが晃洋書房から刊行された『現代哲学の根本問題』ですが、あのシリーズ自体は翻訳でした。そこからSelbstdenkenがどのように展開したのかという点についてはいろいろな評価があると思います。

中畑　現代哲学研究会はたしかに京都における一つの大きな動きではあったので、井上さんのような方にその歴史を回顧するようなものを書いていただけるとよいと思います。

対話性の回復——今後の『哲学研究』

中畑　さて、これまであまり触れてこられなかった点ですが、藤田先生に最初に説明していただいたように『哲学研究』は最初から西洋哲学に限られず、中国哲学やインド哲学、さらに心理学や社会学の研究者の論文を掲載していたわけですが、当時は現在よりもそうした学問と哲学との連続性は強かったので違和感は比較的少なかったかもしれません。しかし現在に至っても美学美術史や旧哲学科に属していた中国哲学やインド哲学、心理学、社会学などの研究者に京都哲学会での講演をお願いし、また論文の寄稿をしていただいています。これだけ学問の専門分化が進んだなかで特定の学問分野に特化しないで続けていくということは希な試みだと思うのですが、この点について少しお話を伺いたいと思います。

氣多　五百五十号に社会学の臼井二尚さんが寄稿しているエッセイのなかで、社会学の理論的基礎は哲学にあるということを書いておられるように、他の学問分野でも基礎理論や方法論に哲学は重要だ、という認識があったのではないでしょうか。だから『哲学研究』に寄稿しても違和感がなかっ

たのではないかと推測できます。

藤田　そういうことはあるかと思います。この問題は、今後継続されるべき『哲学研究』の意図と理念にもかかわってくると思います。創刊当時は、個別学問の枠に囚われないで人間の知の可能性を問うという姿勢があり、最初にいったようにさまざまな分野の方に書いていただいた。現在でもその方針は基本的に維持されている。そのように個別科学の枠に囚われないで議論することで見えてくることがあるのではないか。そういう観点から、私が『哲学研究』の編集に携わっていたころに学問の垣根を越えた特集号を企画して刊行しました。そういう形は必ずしも継続されてはいませんが、個別の学問の枠を超えた議論をしていくということは『哲学研究』に求められる性格ないし目標としてあると思っています。この点、現在編集に携わっている中畑さんいかがでしょう

中畑　現在でも講演会は旧哲学科に所属していた社会学や心理学の先生方にも依頼し、またその講演を原稿として『哲学研究』に寄稿いただいています。ですから、形の上では創刊当時のあり方を維持している。ただし、こうした異なる分野の学問が集うことが、藤田先生がおっしゃるような個々の学問の枠を超えたものとなるためには、特集やシンポジウム、座談会などの対話性の強い場を設ける必要があるでしょうし、さらにそうした場が実際に意義あるものとなるためには、哲学の方々が努力する必要がある。つまり自分の専門分野以外に、個別科学の状況をもう少し学んだうえで共通の土俵をつくるように心がける必要があると思います。哲学の研究者は、さまざまな方法論や概念装置、思考の枠組に通じている方が多いので少し勉強すれば可能だとは思うのですが。

氣多　シンポジウムや座談会を組んでそれを『哲学研究』に掲載するとか、あるいはいま哲学が関心をもったり関わったりする分野は多様なので、旧哲学科の分野に限らず、そうした分野の方を招いてミニ・レクチャーをしていただいて、それに対して哲学者たちが質問や応答をして議論をする、それをそのまま載せるとかいった工夫が考えられます。いままでのように論文を載せるとしても、残念ながら、若い人にとって業績づくりという観点から見ると、『哲学研究』は「晴れ舞台」と言われたようなかつての権威をもって見られるわけではない。もっと自由で根本的な議論ができるような、しかもあまり負担のかからない雑誌作りを考えた方がいいと思います。講演会も、パネルディスカッションや基調講演とそれに対する応答といった形式も考えられます。そうした場には、京大のスタッフだけでなく、関心のある会員やとりわけ若い人に積極的にかかわってもらうとか……

中畑　いわば初期の「手習い草紙」的な性格や対話的特質をもう一度取り戻すという方向でしょうか。そのためには、年に何回も出せるといいのでしょうが。

上原　教員の特殊講義は活用できないでしょうか（笑い）。

藤田　西田や田辺はそうしていたわけですからね。ともかくいまの若い人が読みたいと思うような魅力ある誌面作りをしていく必要があり、その一つは学問の垣根を越えた議論の場をつくることだと思います。

中畑　魅力ある誌面ということでは、きょうお話をうかがったことからすると、論争的な場という性格をより強くもたせるということも考えられますね。それをある程度意図的におこなう。たとえば私が「藤田先生に教えを乞う」というような論文を書くとか（笑い）。

藤田　内実はこっぴどく叩くのでしょ（笑い）。でも、そういうのはたしかにあると思います。誰々に真意を問うという形で論争の場を開き、それに対する応答を掲載する。まさに左右田喜一郎の「西田哲学の方法について――西田博士の教えを乞う」がそうだったわけで、そうしたやりとりは西田自身にも大きな影響を与えたと思います。そうした企画は確かに今後の課題になると思います。日本の哲学的風土のなかでは困難もあるでしょうが。

氣多　いま若手の人たちの場合、課程博士論文をはじめとして学術論文にはさまざまな制約が課せられていて、関係文献を博捜して新しい知見を提出するなどそのスタイルが決まっており、初期の『哲学研究』のような「手習い草紙」としての論文はどこにも出せません。しかしそうした制約を離れて哲学の思索をしたい、議論したいという人たちも少なくない。そうした人たちの議論をすくい上げるような場にしたらどうでしょうか。まだまだ『哲学研究』を使える可能性があるのではないでしょうか。

上原　現在の、評価をベースにしたアカデミックな哲学に対して、それとは別に対話をベースとした哲学の動きが広がっていますが、そうしたものを意識して場所を提供するということですか。

氣多　たしかにいま哲学カフェなどの運動もありますが、『哲学研究』の伝統からすると、もっと専門的な哲学研究者のあいだでの哲学サロンのような場が考えられます。いわば高いレベルでの交流。

上原　それも『哲学研究』の原点に戻る方向ですね。

中畑　たしかにいまの大学人には「評価」ということが重くのしかかっており、研究者は自分の専門性をより強く意識せざるをえませんが、他方で日本語以外の言語で書くなど、一般の読者や日本の社会との関係が失われていくということがあるかもしれません。初期の『哲学研究』は、専門性と一般の人びととの関わりをある意味ではうまく両立していたところもあったと思われるので、その点でも創刊当初の精神に学びながら、他方でその精神を時代に合わせて具体的にどのように実現するのか、ということを考えなければならない。そういう課題をいただいたと思います。

この座談会では、主として『哲学研究』という媒体を中心

に京都の哲学の歴史を振り返っていただきましたが、そのことを通じて現在の『哲学研究』が直面している課題や期待される役割をあらためて確認するとともに、それを考えるための材料も豊富に提供していただいたと思います。長時間にわたっての興味深いお話ありがとうございました。

（ふじた・まさかつ
京都大学大学院総合生存学館教授／日本哲学史）
（けた・まさこ
京都大学大学院文学研究科教授／宗教哲学）
（いのうえ・かつひと
関西大学文学部教授／比較宗教哲学）
（なかはた・まさし
京都大学大学院文学研究科教授／西洋哲学史）
（うえはら・まゆこ
京都大学大学院文学研究科教授／日本哲学史）